

緑生瓦版

2011.01.01
第三十号

平成二十三年の年頭にあって

昨年は、何といつても、「生物多様性」につきると思います。「COP10」が名古屋で開催されたことが、大きな要因ではあると思いますが、われわれの環境調査の業界で、もし仮に流行語大賞を選ぶとしたら、間違いなく「生物多様性」が上位に入ったでしょう。それから、もうひとつ「CSR」というのも、大賞の上位に食い込むのではないかと思います。CSRを解説するまでもないと思いますが、企業の社会的な貢献、すなわち企業が本業以外においても、社会的に役立つ活動を実施することです。

面白い現象というのは「生物多様性」と「CSR」が結びついて、企業の社会的活動が生物多様性の保全や向上に寄与するといったことがCSRのなかで脚光を浴びているということです。企業がこれまでにそれほど明確な目的意識を持つことなく行ってきた社会的な活動が、「生物多様性」の保全・向上といった「社会的貢献」によって新しい「目的」意識を持つようになったということだと思います。

環境調査の業界は、事業仕分けなどによる公共事業の削減によっていま岐路に立たされています。これまでの公共事業に頼り切ってきた路線から、新しい分野を模索しているところなのです。



そのようなところにあつて、生物多様性という新たな社会的な使命、目的を持ったCSRの展開のなかに、新しいビジネスチャンスがあるのではないのでしょうか。

弊社では、社内組織として「生物多様性ソリューション室」を設け、「生物多様性CSR担当」を配して、積極的な取り組みを図っております。そのなかで、生物多様性ソリューションや生物多様性CSRで何を指すのか、また何をやるうとするのかということ、自分たちなりに整理しております。

もっとも重要なポイントは、すべての企業の方々が、「生物多様性」という言葉や概念を充分に理解されていない場合があるという点と、CSRの取り組みではその成果をできうるかぎり早く形にしたいという点だと考えています。

これらのことから的確に伝えるために、簡易でわかりやすい生物多様性の評価の手法を創ることが重要であると考えています。たしかに、こういったものは一朝一夕で出来るものではありませんが、弊社においては、そのような作業を自治体や企業といっしょになって現在、着々と進めており、その成果も出ております。



恭賀新年

旧年中は格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます。本年も倍旧のご愛顧の程お願い申し上げます。

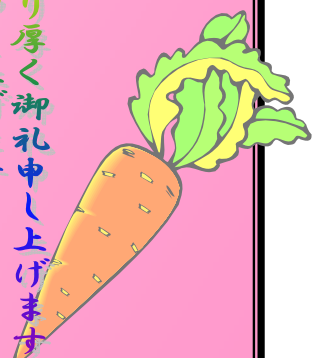
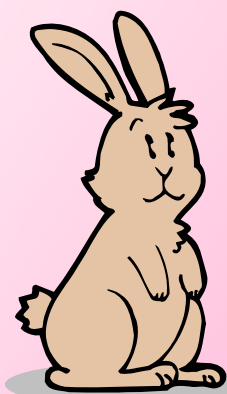
平成二十三年 元旦

もしこのような内容に興味をお持ちの企業の担当者がおられましたら、いつでも気軽に声をかけていただければ、ご相談にのらせていただきたいと思います。

さて、話を少しもどして、弊社の今年の目標について述べさせていただきます。このような厳しい環境に置かれた状況であればあるほど、高い品質が求められます。調査の結果をGISなどの解析を通して、高品質な成果にまとめていくこと、それから、生物多様性CSRの事業化を目標に今年も邁進する所存です。

お客様のご要望に応えるために、努力をしておりますので、本年もよろしくお願いいたします。

代表取締役
井上 康平



平成二十三年 今年も感性をみかいて

新年あけまして

本年もお引き立ての程、
よろしくお願い申しあげます。
昨年十月に名古屋で、生物多
様性条約加盟国会議が開催され
ました。弊社ではその関連でパネ
ルの作成や緑地の多様性評価の
業務を、いくつか受注しました。

夏に日比谷公園における企画
展『東京の公園が担う生物多様
性』のパネルを作成し、都内の動
植物園における取り組みを担当
しました。現場を訪ねての取材は
楽しいものでしたが、上野動物園
における、戦後間もないころから
のツル類をはじめと水禽類保全
の取り組みが、今日、多摩動物公
園でのコウノトリやトキの保全
に繋がっていることを再認識し
ました。

一方、悲しいできごとは、長年
懇意にしてきた印刷業者が、年末
に廃業してしまったことです。価
格的には安い業者ではなかった
のですが技術力は高く、何より職
人気質の残る営業部長を信頼し
てきました。東京都北区からの委
託で、三年連続して植物、野鳥、
昆虫・小動物のガイドブック作成
業務を受注し、無事納品すること
ができたのは、この業者と営業部
長のおかげです。特に野鳥編は自
信作であり、もっと評価されても
いいのに・・・とすら感じていま

社内では若い社員中心に、CS
Rへの積極的な取り組みなど、新
しい動きが出ています。また生物
多様性への世間の関心が高まれ
ば、「生物多様性オフセット」な
どへの動きも、国内で高まってく
るでしょう。そこに弊社のような
生き物のスペシャリストが加わ
ることによって、一歩進んだも
の、よりいいものができるに違
いないと信じています。

上野といえば、東京都から上野
公園の生物調査業務を受注しま
した。我が国を代表する公園であ
りながら、不忍池の鳥類を除いて
はこれまであまり生物調査が行
われていなかったようです。都市
環境下において利用圧の高い公
園ですが、注目に値する種類もい
くつか見つかりました。私にとつ
ては幼いころから馴染みのある
上野という土地に関わることで
できた、昨年最も印象に残る仕事
です。

取締役

田中 利彦

平成二十三年 新年にむけて・・・

新年あけまして

おめでとうございます。

昨年秋に新たに取締役に加
わりました。
平成元年に入社し、今年の四月
で入社二十三年目となります。
入社以来、鳥類を担当し、年間百
日以上は現場に出ています。

体力の衰えを感じつつも、現場
の輝きは何にも代え難いものが
あります。これからは現場で得た
経験を生かし、営業活動にも活用
できたらと考えています。

最近COP10などの開催も
手伝って、生物が注目されていま
す。特に生物資源は、様々な方向
からその重要性が指摘され、この
分野の未解明部分の多さと、その
奥の深さに改めて気付かされま
す。現場でもごく普通(と考えて
いた)の環境で想定していない種
が出現したり、同じ種でも地域や
わずかな時期の違いなどで生息
状況が異なっていたりと、発見の
連続です。そんななかで、最近の
業務では、GISを駆使して、生
息(生育)予測図を作成するなど、
従来困難とされてきた生物価値
の数値化が行われるようになって
きました。完成した予測図をみ
ると、きれいに整理され、思わず
感心してしまいます。

でもちよつと待つてください。そ
の予測図にはどのようなデータ
が使われているのか、地域的な違
いは考慮されているのか、を確認
する必要があります。また、こう
いった予測図は、生態情報の少な
い希少種が対象となつている場
合も多く、データ不足が否めない
ことも少なくありません。とはい
っても、現段階では仕方がありま
せん。結局、GISを使うのは人
間です。それに完璧なものなどが
できるはずもなく、対象種の生息
に効いていそうな情報として、何
があげられ、そのバランスはどう
なのか、そういった事項を生息地
毎に検証し、より現実に近いもの
を追い続け、その種に対する新た
な知見が得られれば、それを情報
として取り入れるなど、少なくと
も予測図づくりはその作業の連
続だと思えます。まず、目の前に
ある予測図がどの段階のものな
のか、自分自身で確認してみること
が、自分自身が自分の専門分野な
ら、色々と試してみるのも興味深
いですね。

本年もお客様との信頼関係を
第一に、励んでいきたいと思いま
す。
本年も何とぞよろしく
お願い申し上げます。

取締役

瀬川 隆司

LINE



うさぎというと「雪
うさぎ」のように白い
体に赤い目というイ
メージを持ちますが、
50種類以上も品種が
あり姿形も様々です。
専門のお店や雑誌が
あるくらいペットと
しても人気がありま
す。ふと気になり世界
最大のうさぎを調べ
てみて驚きます。なん
と体長130cm、体重
は22kgもあるそうで
す。写真を見る限り、
巨大生物といった感
じで、SF映画のワンシ
ーンのようなです。軽い
気持ちでいた自分を
反省しています。

編集後記

お読みいただき、あり
がとうございました。
第三十一号は、春の足
音が聞こえ始める三月
一日の発行を予定して
います。

特集では、スタッフの
所属や専門等を改めて
紹介させていただきます。

